

[論文]

『六度集經』における「仁」と仏法
——クサ・ジャータカの宝珠・王法・仏法——

伊 藤 千賀子

Benevolence (仁) and Buddhist Law in *The Liu Du Ji Jing*:

Jewel, Royal Law and Buddhist Law in Kusa-Jātaka

Ito, Chikako

Buddhism spread worldwide and established its status. However, its diffusion was difficult because Buddhist teachings were hard to understand. To solely read Buddhist teachings were not to understand Buddhism. Therefore, monks used illustrative examples such as fable to explain the essence of Buddhism. Some of them were the Buddhist tales called jātaaka. When Buddhist monks they deliver sermons they used these tales to make it easier for people to understand. These tales bridged the gap between teachings and people.

The synopsis of Kusa-jātaka is ‘The ugly prince married a beautiful princess from a neighboring country. The princess was frightened by the prince’s ugliness and run away to her father’s kingdom. He chased her for a long time, but she kept rejecting him. One day, 7 kingdoms challenged her father’s kingdom. The ugly prince fought against the 7 kingdoms and defeated the enemies with his lion’s roar. The prince noticed his own horrible ugliness for the first time and tried to commit suicide. The Sakka (帝釈天) knew this and gave a jewel that makes the ugly prince beautiful. When he put the jewel on his head, he became very beautiful. After that, the prince and the princess lived happily. Their kingdom prospered greatly.’

I compared 6 sutras which have the same stories. *The Liu Du Ji Jing* (『六度集經』) is different from other sutras. In *The Liu Du Ji Jing*, ‘the ugly prince became beautiful because of his right governance’.

I will make clear the reason why *The Liu Du Ji Jing* is different from other sutras. *The Liu Du Ji Jing* was made by Kang Seng Hui (康僧会). I think Kang Seng Hui tried to educate kings to become true kings using *The Liu Du Ji Jing* consisting 91 jātaḥ. In this paper I will solve this using the word 'jin (仁, Benevolence)'.

キーワード：Kusa-jātaka, 六度集経, 康僧会, 仁, 仁道

1. はじめに

ジャータカはモチーフが同じでも、時代や地域、文化の影響、伝播の仕方によって、それぞれが独自の特徴を有し、様々な形に変化してきた。時として政治的な領域に及ぶような変容をとげることもある。

今回取り上げるクサ・ジャータカは、出生の不思議、嫁取り、結婚生活、逃亡した新婦へのアプローチ、戦闘、因果応報、これらすべてを包含して輪廻思想が説かれ、ジャータカの中でも興味深いものである。

筆者は10年ほど前に、クサ・ジャータカを整理して伝播などについて発表した⁽¹⁾。しかし、その時、疑問に思いながらも全く解明できなかったことがある。それは、現在物語の最後に当たる部分—「醜い王子が美しくなる」手段が6所伝のうち、5所伝は「帝釈天から与えられた宝珠を頭に載せる」ことであったが、『六度集経』だけは「正しい統治を行ったことによって美しくなった」という部分である。本稿では、帝釈天の宝珠が登場しなかった理由を『六度集経』の特殊な事情を中心にして明らかにしていきたい。なお、先行研究は見当たらなかった。

検討する所伝は全部で以下の6所伝となる。

パーリ語所伝

Jātaka 531 *Kusa-jātaka*⁽²⁾

サンスクリット語所伝

Mahāvastu III⁽³⁾

漢訳所伝⁽⁴⁾

『六度集經』84「遮羅国王經」⁽⁵⁾ 吳，康僧会訳，3世紀⁽⁶⁾。

『賢愚經』14「降六師品」⁽⁷⁾ (後半) 元魏，慧覺等訳，445年⁽⁸⁾。

『根本説一切有部毘奈耶薬事』巻13「尾施縛多羅縁」⁽⁹⁾ 唐 義浄訳
700-711年⁽¹⁰⁾。

『菩薩本生鬘論』「最勝神化縁起第四」⁽¹¹⁾ 宋 紹徳慧詢等訳，960-1127
年⁽¹²⁾。

2. 過去物語の基本的なあらすじ

過去物語部分の基本的なあらすじは次の通りである。

跡継ぎに恵まれなかった国王は、帝釈天の助けにより男子をもうけるが、その子はひどく醜かった。太子は美しい王女と結婚する。しかし王女は太子のあまりの醜さに恐れをなして、国へと逃げ帰った。太子は王女に近づくために琵琶演奏家、染物屋、陶工、料理人などになって、執拗に追いかけるが、王女は太子を拒否し続けた。そのころ① 7つの国が王女の国に戦いを挑んできた。太子は彼らを獅子吼によって退治した。

② 王女の拒否の理由が太子の醜さだと知って、太子は自殺しようとした。帝釈天は頭にのせると美しくなるという宝珠を太子に与えた。 その後は、夫婦仲よく、国は大いに栄えた。

(アンダーライン及び①②は筆者)

今回、問題とするのは下線の部分である。一重下線①を【他国との戦闘】、二重下線②を【美しくなる】とする。

3. 【美しくなる】の記述

モチーフ②【美しくなる】の部分のそれぞれの所伝の記述は下記の通りである。

Jātaka (数字は偈の番号) (ジャータカでは、【他国との戦闘】のなかに【美しくなる】が含まれている)

(クサ王が自分の妃パパーヴァティーを救うために他国の7人の王と戦っている時)

81. 帝釈天は戦いを上の方から見て喜んで
クサ王にヴェローチャナ珠を与えた
82. 王は戦いに勝利しヴェローチャナ珠を得た
王は象の背に乗りナガラ城に入って行った
(略)
90. こうして彼はパパーヴァティーとヴェローチャナ珠をともなって
千人力のクサ王はクサーヴァティーへ帰って行った
91. かれらが一つの車に乗ってクサーヴァティーへ入って行った時,
面立ちと姿形の美しさは 互いに等しくお似合い (となっていた)⁽¹³⁾

Mahāvastu

そこで、天主シャクラは天界の赤真珠の首飾りの真ん中にある、ジョーティラサと呼ばれる天界の宝珠を手にとると、空中に留まり、クシャ王に告げた。「大王よ、自殺してはならぬ。そうではなく宝石ジョーティラサがはめ込まれた首飾りを頭に着けよ。これさえ着ければ、閻浮提全土に住むどの男も、容姿や容貌ではまったく [あなたの]、右に出る者はおらぬ。もし元通りの容姿や顔つきに戻りたいときは、宝石ジョーティラサがはめ込まれた首飾りを衣の中に隠すがよい。そうすれば、あなたの容姿と容貌とは元通りになるだろう」と⁽¹⁴⁾。

『六度集経』

大王崩殂し、太子代位せり。衆罪を太赦し、五戒・六度・八斎・十善を以て兆民を教化し、災隣都て息む。国豊かにして衆安んぜり。大化流行し、皆三尊を奉ず。徳盛んにして福帰し、衆病消滅す。顔影粲粲として、彼の桃華に踰えたり⁽¹⁵⁾。

『賢愚經』

便ち林間に至り、乃ち自殺せんと欲す。帝釈は遙かに知り、即ち下り、辺に至り、由縁する所を問う。其の意を慰諭し、一宝珠を与え之れに告げて言はく、「常に此の珠を以て、汝の頂上に著けよ。殊異にして我が如く端正なるを得るべし」と。尋いで喜び奉受す。其の頂上に安んじ、身の倍異なるを覚えり。還り宮中に至り、自ら弓具を取り、外に至り戯れんと欲す。婦は見て識らず。尋いで之れに語りて曰わく、「汝は是れ何人ぞ。此の物に触れること莫かれ。我が夫、若し来たらば、儻しくは相い傷損せん」と。尋いで婦に語りて言わく、「我れは是れ汝が夫なり」と。婦は殊お信ぜずして、之れに語りて言く「我が夫極めて醜し。汝は形端正なり。汝、是れ何人にして、是れ我が夫と説くか」と。夫即ち珠を却け、還び故の形を示す⁽¹⁶⁾。

『根本説一切有部毘奈耶藥事』

即ち叢林に入り、自ら身を害せんと欲す。時に天帝釈は太子を觀見て、「是れは賢劫中の菩薩なり。若し自ら之れを害すれば、必ず大苦を受けん。我若し變じて端政ならしめば、即ち自ら死なず」と。時に天帝は太子に螺髻中の宝珠を与う。戴せ已わるに、太子は天の如く形貌端嚴にして七宝を獲具う⁽¹⁷⁾。

『菩薩本生鬘論』

便ち林中に至り、乃ち自盡せんと欲す。帝釈遙かに知り、下って其の所に至り、善言にて慰諭し一宝珠を賜い、「密かに此れを汝の頂上に置かしめば、容儀我が如く異なること無し」と。跪き受け已わり喜び家に還る。婦は見て識らず、乃ち之れに語りて曰わく、「卿は是れ何人ぞ」と。夫は即ち具さに珠を得るの由を説く⁽¹⁸⁾。

以上から『六度集經』以外の所伝は「帝釈天より与えられた珠によって美しくなる」のだが、『六度集經』だけは正しい統治を行ったことによって、

太子の容貌は光り輝きその美しさは桃の花を越えたのである。

4. 太子の説教

『六度集経』のこの第84話にはもう一つ王の統治について記されている。それは、【他国との戦闘】の中で、7つの国の王たちが太子⁽¹⁹⁾妃の父の国に攻めて来た時、助太刀に現れた太子が唐突に7人の王に説教をする場面にある。

太子高声に七国王に謂う。厥の音遠くに震うこと師子吼の若し。仏の教えを以て諭す、「天の為に民を牧するには、当に仁道を以てすべし」と⁽²⁰⁾。

では、他の所伝では、これと同じ場面はどのように描かれているのだろうか。

Jātaka (数字は偈の番号)

78. クサは象の背に乗って、またパバーヴァティーも乗せて

戦いに臨むや否や 獅子吼した

79. 彼の雄たけびを耳にして クサの大音声に恐れをなして

ライオンの前の獣たちのように 王たちはみな逃げ出した⁽²¹⁾

Mahāvastu

クシャ王は立派な象に乗り、大勢の人を従えて、都城の門をなぎ倒して出ていくと、クシャ王は獅子吼した。彼が獅子吼すると、7人の王は皆、軍隊や乗り物もろとも退散してしまった⁽²²⁾。

『賢愚経』

時に多羅睺施は即ち弓貝を持ち、城を出て賊に趣く。貝を吹き弓を叩く。六軍⁽²³⁾驚駭し、怖れて動くこと能わず。即ち軍中に入り、六王の首を斬り、冠飾を奪い取り、其の衆を撰録す⁽²⁴⁾。

『根本説一切有部毘奈耶藥事』と『菩薩本生鬘論』にはこのモチーフは存在しない。

以上から、この場面では『六度集經』以外には、理想の王の統治について述べるような場面は存在しない。

5. 「仁道」という単語

前章の【他国との戦闘】の中で、『六度集經』は「仏の教えを以て喩す、『天の為に民を牧するには、当に仁道を以てすべし』」⁽²⁵⁾となっていて、仏教とは仁道であると述べている。ここ以外に『六度集經』に「仁道」という単語は7ヶ所存在する。1話の中に仁道が2ヶ含まれるものが2話あるので、取り上げる話数は5話になる。順番に見ていく。

(1) 第14話は、人々の望むままに布施を行う太子は、どのような戦いにおいても勝利を収めることのできる白象を敵国に布施してしまう。これが原因で、国を追われ山に隠棲することになった太子に付いていくと決めた太子妃は「太子は国に在りて、四遠に布施す。吾れは輒ち願を同じくす。今当に險を歴すべし。猶お留り榮を守るは、豈に仁道ならんや」⁽²⁶⁾と言う。ここでいう仁道は「宮殿に住んで榮華の生活を続けないこと」であるので、八戒や十戒にある高くゆったりしたベッドに寝ないという「不坐高広大床」や歌舞音楽を見たり聞いたりせず、装飾品や化粧・香水などで身を飾らないという「不得歌舞作樂香油塗身塗身」⁽²⁷⁾に当たる。

(2) 第31話に、「仁道」は2ヶ所存在する。一つは、旱魃で飢饉に陥った兄弟三人が自分たちの妻を次々と殺して食べていくが、一番下の弟だけがそれを拒否して「彼を殺し己を全くするは仏の仁道に非ず。吾れは為さず」⁽²⁸⁾と言う。ここでの仁道は不殺生戒を指す。もう一つは、菩薩の妻が菩薩を捨てて他の男と逃げたことを知った人々が「斯れ戮すべきなり」⁽²⁹⁾と言ったが、菩薩は「吾れは寧ろ体命を殞すとも、仁道を去らず」⁽³⁰⁾と答えた。したがっ

て、この仁道は不殺生戒を意味している。

(3) 第41話にも仁道は2ヶ所見られる。人肉を好んで食べる王について、世尊は「味に於いて厚き者は即ち仁道薄し。仁道薄き者は豺狼の心興こす。夫れ狼為るは苟に肉の味を貪り、物の命を賊う」⁽³¹⁾と言った。ここでの仁道は両方とも、仏教を信じる心ということになる。言い換えれば、仏教の戒律を守らない者、この場合は不殺生戒を守らないものということになる。

(4) 第54話は、話の筋が非常に入り組んでいる上に、文章が大変難しく、筆者には今一つ理解が困難であることを最初にお断りしておく。要旨は、釈迦族の滅亡は過去の釈迦族の悪行の結果であるため、縁起の道理により、釈迦も一族を助けることができなかったということである。さて、後に釈迦族を壊滅させることになる毘琉璃王は「仏が道辺の半枯の樹に坐」⁽³²⁾しているのを見て、ブッダに「純生に坐さずして半枯に処すは將た由有らんか」⁽³³⁾と問うと、ブッダは「斯の樹は釈と名づく、吾れは其の名を愛し、仁道を以て其の難を濟い、其の枯を潤し、其の生を恵む」⁽³⁴⁾と答えた。要するに、ブッダは自分の属する種族である釈迦族に愛着があり、釈迦族が仁道を守っていたならば滅亡しなかったと思っているということであろう。ともかく、毘琉璃王も含めた釈迦族が減びた後、ブッダは弟子たちに向かって、次のように教えを説く。「爾の心を端し、徳恵を興し、群生を安んじ、己より恕し彼を濟い、慎んで、殺生し、人の財物を盗み、彼の妻にあらざるに姪し、両舌惡罵し、妄言綺語し、嫉妬恚癡し、三尊を誹謗することなかれ。禍の大なることは十惡より尚きことなし。福榮の尊きことは、夫れ唯だ十善のみ。物を殺す者は自ら殺すと為す。物を活かす者は自ら活かす者と為す。心に惡を念じ、口に惡を言い、身に惡を行うことを策めるは、心に道を念じ、口に道を行い、身に道を行うに若くはなし。善を施さば福が追ひ、惡を為さば禍の尋ねること、猶お響きの声に應じ、影の形を追うがごとし」⁽³⁵⁾。このブッダの言葉には多くの戒律と縁起が含まれ、ここでの仁道は、即ち仏道である。

(5) 第70話は悪い龍を兄弟二人で成敗する話である。弟が兄に「仏戒は殺を以て凶虐の大と為す。生を活かすは仁道の首なり」と言う。ここでの仁道は不殺生戒を指す。

さらに、この「仁道」という単語の『六度集經』以外の出所は、『大正藏』の1巻から55巻には13ヶ所である⁽³⁶⁾。『経律異相』の4ヶ所⁽³⁷⁾は『六度集經』からの引用、『仏祖統紀』の2ヶ所⁽³⁸⁾は人名である。『弘明集』に2ヶ所⁽³⁹⁾、『広弘明集』に1ヶ所⁽⁴⁰⁾、『北山録』に1ヶ所⁽⁴¹⁾があるが、これらの經典は仏教を儒教および道教と比較したものであって、仏教としての「仁道」ではない。残りの『仏祖統紀』⁽⁴²⁾『仏祖歴代通載』⁽⁴³⁾『釈氏稽古略』⁽⁴⁴⁾にあるものは『広弘明集』および『北山録』と同文である。以上から、為政者に理想の統治をさせるために、仁道という言葉を借りて仏教を説くという内容は『六度集經』だけであり、『六度集經』はかなり特異な經典であることは明らかである。

6. 王と仁

『六度集經』全体から、王と仁に関係する部分を「王にとって最も重要なものは仁」「方法あるいは手段としての仁」「仁政の人々への影響」「王の不仁とその影響」「王にとっての仁政の結果」の5つに分類する。

(1) 王にとって最も重要なものは仁

クサ王子は7つの国の王子たちと対峙した時に、「天の為に民を牧するは仁道を以てすべし」⁽⁴⁵⁾と獅子吼し、大国王である長寿王は「臨終に仁を盡くせの誠め」⁽⁴⁶⁾を遺した。

(2) 方法あるいは手段としての仁

仁道の中身は、「五戒・六度・八斎・十善を以て兆民を教化」⁽⁴⁷⁾することであり、あるいは「五教を以て政を治め、人民を枉ず」⁽⁴⁸⁾とする。五教とは

「一に慈仁にして殺さず、恩は群生に及ぶ。二は清譲にして盗まず。己を捐てて衆を済う。三に貞潔にして姪れず。諸欲を犯さず。四に誠信にして欺かず。言に華飾なし。五に孝を奉じて酔わず。行いに沾汚なし」⁽⁴⁹⁾であり、「孝を奉ずる」以外はすべて先の仏教の戒律に含まれる。よって、王の仁とは仏教の戒律によって、人々を教化することである。

(3) 仁政の人々への影響

「仁は普く慈しめば、祐報は響應し」⁽⁵⁰⁾、「臣は忠なり。父義にして子孝なり。夫信にして婦貞なり。比門賢」⁽⁵¹⁾がいるようになり、「国は豊かに民は富み相い率うこと道を以てす。民に殺す者なく、人の財物を盗み、人の婦女に姪し、両舌・悪口・妄言・綺語・嫉妬・悲癡、兇愚の心は寂として消滅す。皆な仏を信じ、法を信じ、沙門を信じ、善を為せば福あり、悪を作せば殃あるを信ず。国を挙げて和楽し、鞭杖行われず。仇敵も臣と称し、戦器蔵に朽ち、牢獄に繋囚なし。人民善を称え、我が生遇うかな」⁽⁵²⁾と己の境遇を喜び、仁に感化されて「偷賊も施を競う」⁽⁵³⁾ようになり、「其の仁は遠く照らし、禽獸も附恃」⁽⁵⁴⁾するほどで、「遐邇、仁を称し、民の帰すること流るるがごとき」⁽⁵⁵⁾となる。

(4) 王の不仁とその影響

国が日照りになると、その責任は王にあり、王は「民の飢えるは即ち吾れ之れを餓えしむ。民の寒きは即ち吾れ之れを裸に」⁽⁵⁶⁾していて、「民の苦楽は我に在るのみ」⁽⁵⁷⁾と責任を自覚し、その原因は、王の「心穢れ行い濁り、三尊四恩の教えに合わず、人民を苦酷す。罪当に己を伐ち下劣に流被せんとす。枯旱累載し、黎庶飢饉し、怨み痛みて情を傷ましむ」⁽⁵⁸⁾民の苦を除くために、「願わくは民の災を除き、禍を以て我を罪せんことを」⁽⁵⁹⁾と天に願う。長い間日照りが続いた時に、王は「心を靖らかにして斎肅たりて食を退け献を絶つ。頓首して過を悔いて曰わく、『民の不善の咎は我身に在り。願わくば吾が命を喪ぼして民に雨沢を恵まんことを』」⁽⁶⁰⁾と祈る。

(5) 王にとっての仁政の結果

王が仁政を行った結果、王は「即ち五福を得る。一は長寿。二は顔華日に更まり好色なり。三は徳にして八方上下に勳ず。四は病なく気力日に増す。五は四境安隠にして心常に歓喜す。王後に寿終わるに、強健の人の如く食に飽きて快く臥す。忽然として忉利天上に上生す」⁽⁶¹⁾ という5つの福を得ることができる。この中の2番目の「顔華日に更まり好色なり」が、クサ王子の「顔影輝煌として彼の桃華に踰えたり」⁽⁶²⁾ に当たる。

7. 仁道を勧めた理由

なぜ康僧会は『六度集經』にこのような仁道によって国を治めること、具体的には仏教の五戒や六波羅蜜・八斎・十善によって万民を教化するように勧めたのだろうか。

『高僧伝』に「僧会は呉王朝において正しい仏の教えをしきりに説法したが、孫皓の性格は粗暴であり、精妙な教義には程遠かったので、ただ応報の卑近な事柄を述べてその心を啓発した」⁽⁶³⁾ とある。すなわち、康僧会は『六度集經』という經典をつかって、仏教思想を政治にいかして国を変えていこうともくろんだのである。つまり、『六度集經』は「仏教によって国主を説き伏せようとした」⁽⁶⁴⁾、王へ向けた書なのであった。康僧会は当時の中国江南の呉王朝の植民地であったベトナム出身の僧である。ベトナムに宗主国から派遣されて来た官吏は大変横暴であった。植民地の人々を彼らから守るためには、凶暴な現地の官吏を正さなければならず——根本的に彼らを正すためには大元である宗主国の為政者を正さなければいけないと考えた⁽⁶⁵⁾。このように『六度集經』編纂の動機が為政者に政治を改めさせるためのものならば、次のことが推定できる。当時の「粗暴で残酷な権力者にそのまま自分の考えを述べれば、2度と目通りがかなわないばかりか、命が危ういと考えられる。命を失っては、権力者が考えと行動を改めるまで説得することは困難である。したがって、康僧会の考えを直接ではなく、インドの經典にはこう書いてあると言って、権力者に講義をしたり、読ませたりするという方法

をとった」⁽⁶⁶⁾のである。

まとめ

以上からわかることは、『六度集経』は粗暴な王に理想の統治の仕方を授けるために作成されたということである。内容は仏教でありながら、表向きは仁あるいは仁道という言葉を使って、王を説得した。また、『六度集経』だけは「正しい統治を行ったことによって美しくなった」とされる部分に関していえば、『六度集経』を王への教育のために使用する場合、クサ王子が帝釈天から同情されて宝珠をもらって美男になるという受け身の形では全く教訓にならない。そこで、能動的に理想の政治を行ったが故に王自身も美しくなっていったと内容を変改したと推測できる。

註

- (1) [伊藤千賀子 2008]。
- (2) [Viggo Fausbøll ed. 1990: 278–312] [片山一良訳 1982: 123–155]。パース語で書かれた南方上座部の経蔵（小部）に含まれるテキスト。22篇547のジャータカから成る。ジャータカはもと特別な形式と内容をそなえた古い仏教文学のジャンルの名称。ブッダがこの世に生まれる以前の物語。ブッダが過去世においていかなる善行を積んだために現在世でブッダとなることができたかの因果を物語る。ジャータカは現在物語（ブッダがいかなる因縁にもとづいて、過去世のことを語ったかの由来を説く）・過去物語（現在世の出来事が由って起こる過去世の由来を説く本生物話の主要部）・結合部（現在世の登場人物と過去世の登場人物を結びつけて、因果関係を明らかにする結論部分）[仏典解題 1985: 68–69]。しかしながら、これらの3つの用語は確定したものがない。したがって現在物語・過去物語・結合部というのは筆者の使用しているものである。
- (3) [Émile Sénart ed. 1890: 420–496] [Émile Sénart ed. 1897: 1–27]。説一切出世部の律蔵の中に含まれていたブッダの伝記物語が別出されたもの。3部分に分かれ、第1篇はブッダの前生譚、第2篇は兜率天に生まれてから菩提樹の下で悟りを開くまで、第3篇は鹿野苑での初転法輪から教団設立にいたる教化の事跡および弟子たちの前生譚を説く。非常に古い要素を含みながら、4–5世紀ごろの記述と認められる部分があるので、長い年月の間に多くの編著者の手を経て現在の形が成立したもの

- と考えられる。漢訳およびチベット訳は存在しない〔総合仏教 1987: 1356〕。
- (4) 以下の4所伝以外に『経律異相』巻第32「遮羅國儲形醜失妃運智還得四」(『大正藏』五三174c16-175c1)があるが、『六度集經』を引用したものなので、ここでは取り上げない。
- (5) 『大正藏』三46b5-47b14。
- (6) AD. 247あるいはAD. 252に成立とされる。『大正藏』第3巻の一番初めに掲載されているNo. 152の經典でpp. 1-51を占める。8巻または9巻。六度すなわち六波羅蜜の分類に従って布施(26話)・持戒(15話)・忍辱(13話)・精進(19話)・禪定(9話)・智慧(9話)合計91話のジャータカを集めたもの〔総合仏教 1987: 1501〕。布施は1巻から3巻まで。持戒から智慧までは各1巻を当てる〔大藏經全解説 1998: 39-40〕。『大正藏』など一般的には呉の康僧会の訳とされてきた。しかしながら、筆者は、実際には呉の為政者を教育するために、康僧会がジャータカの形を借りて作成したものと推定している。詳しくは、〔伊藤千賀子 2013〕〔伊藤千賀子 2016〕を参照されたい。
- (7) 『大正藏』四360c14-366a10。クシャ・ジャータカに相当する所伝は「降六師品」の一部である。「降六師品」の中には、現在物語、2つの過去物語、大過去物語、および過去物語と大過去物語のそれぞれに付随して3つの結合部が存在する。
- (8) 仏教的な立場から見た賢者と愚者の寓話の集成。69品からなる。69品のうち53品は現在と過去の出来事の因縁物語である。10品が現世にすぐ行為の結果の現れた因縁物語、5品が現在過去未来にわたる因縁物語である〔仏書解説 1980: 第3巻 210d-211c〕。
- (9) 『大正藏』二四57b24-58a19。世の中の無常と布施の大切さを説いた6篇からなるが、それぞれは独立したもので、互いに関係はない。
- (10) 律部。18巻。業事18巻といっても、本書において業食法に関する記述は、初めの2巻に存するだけであって、他はことごとく本生因縁譚が述べられている。前生因縁譚または説話等の数は80を超える。そのうち、第13巻・第14巻における仏本生譚としての善財童子と尾施縛多羅すなわち善施太子との記述は、2大双壁とも称し文学的表現を持っており、華嚴經入法界品を連想させ、興味深いものがある。また本書においては、大乘的用語が多く見られる。例えば、菩薩行、称名号、回向、法界、願力、誓願弘願、六波羅蜜などであって、これらは他の律藏ではみられないものである〔仏書解説 1980: 三53a-c〕『仏典解題』179b-180a〔大藏經全解説 1998: 392〕。
- (11) 『大正藏』三334c28-336c11。
- (12) 宋の紹徳・慧詢等訳と記されているが、少なくとも4人以上の作業(10世紀から11世紀初め)。本縁部。16巻34章。本論は内容の異なる2つの部分から構成され

ている。第一部は1-4巻で、ブッダ自身の物語 6 話、ブッダの高弟である目連尊者の教化物語など 14 話。第二部は5-16巻で11-34章。前の10章を欠き、どの経の論（註釈）かは不明。論の内容は菩薩行の称揚、寂靜の法、持戒の具体的なあり方、布施について、菩薩の根本は調伏と寂靜であり、静住を本とし智慧によって煩惱を除くべきこと、貪瞋痴を遠ざけること等24項目にわたって、大乘思想にもとづく菩薩道の実践について詳説している〔仏書解説 1980: 九412c-d〕〔大蔵經全解説 1998: 44〕。

(13) 日本語訳は、〔片山一良訳 1982: 154〕参照。

81. Tasmim saṅgāmasāsasmim passivā haṭṭhmanāso
Kusassa rañño devindo adā Verocanaṃ maṇim.
82. So taṃ vijitvā saṅgāmaṃ laddhā Verocanaṃ maṇim
hatthikkhandhagato rājā pāvekkhi Nagaraṃ puraṃ.
(略)
90. Pabhāvatīṇ ca ādāya maṇim Verocanaṃ tadā
Kusāvatim Kuso rājā agamāsi mahabbalo.
91. Ty-assu ekarathe yantā pavisantā Kusāvatim
samānavanṇrūpena n' aññaṃaññātirocisum.
92. Mātā puttena saṃgañchi, ubhaya ca jayampati
Samaggā te tadā āsum, phītaṃ dharaṇim āvasun ti.
〔Viggo Fausböll ed. 1990: 310-311〕

(14) 〔平岡聡 2010: 159〕。So dhāni śakro devānāmindro divyasya lohitamuktikasya ekāvalikāya madhye jyotīrasaṃ nāma divyaṃ maṇiratnaṃ taṃ gṛhṇīyāna daihāyasamantarīkṣe sthito rājā kuśamāmantrayati || mahārāja mā ātmānamupakramāhi api tu hamāmekāvalikāṃ jyotīrasaratnaṃ śīrṣe ābaddhāhi | tataḥ etena ābaddhena sarve jagbudvīpe na koci puruṣo varṇarūpeṇa samasamo bhaviṣyati | api tu yathā icchasi paurāṇakaṃ varṇarūpaṃ tato tāmekāvalikāṃ jyotīrasaratnaṃ vastreṇa pidhehi tataḥ te paurāṇakaṃ varṇarūpaṃ bhaviṣyati || 〔Émile Sénart ed. 1890: 492〕

(15) 〔国訳一切経本縁6. 1935: 207〕参照。「還國有年。大王崩殂。太子代位太赦衆罪。以五戒六度八齋十善。教化兆民。災蔭都息。国豊衆安。大化流行。皆奉三尊。德盛福歸。衆病消滅。顔影粲粲。踰彼桃華。」（『大正藏』三47a24-27）。

(16) 〔国訳一切経本縁7. 1930: 119-120〕参照。「便至林間。乃欲自殺。帝釋遙知。即下到邊。問所由緣。慰喻其意。與一寶珠。而告之言。常以此珠。著汝頂上。可得殊異如我端政。尋喜奉受。安其頂上。覺身倍異。還至宮中。自取弓具。欲至外戲。婦見不識。尋語之曰。汝是何人。莫觸此物。我夫若來。儻相傷損。尋語婦言。我是汝夫。婦殊不信。而語之言。我夫極醜。汝形端正。汝是何人。說是我夫。夫即却珠。

還示故形。」(『大正蔵』四365a20-28)。

- (17) [国訳一切経律23. 1933: 207] 参照。「即入叢林。欲自害身。時天帝釋觀見太子。是賢劫中菩薩。若自害之。必受大苦。我若變令端政。即不自死。于時天帝與太子螺髻中宝珠。戴已。太子如天。形貌端嚴。獲具七宝。」(『大正蔵』二四57c29-58a4)。

この部分の[八尾史 2013: 331]による『根本説一切有部律葉事』のチベット語訳の日本語訳は以下の通り。

かれはある密林に入って首をくくろうとした。神々の主シャクラは考えた。『この者は賢劫の菩薩であるのに、美しい容姿がないために自害する。かれの望みを満たさなければならない』と。シャクラは『王子よ、落胆してはならない。自害をせずにこのチューダーマニ（頭に飾る宝石）を頭につけなさい。そうすれば望みが満たされるであろう』と言って去った。クシャ王子は家に入ろうとすると、門番の男に『これはクシャ王子の宮殿であるから入ってはならない』と遮られた。彼は言った。『そのクシャとは余である。』

かれ（門番）は信用しなかったが、かれ（クシャ）がチューダーマニをはずすと元通りになったので信用した。

- (18) [国訳一切経本縁5. 1929: 282] 参照。「便至林中乃欲自盡。帝釈遙知下至其所。善言慰喻賜一宝珠。密令置此於汝頂上。可得容儀如我無異。跪而受已喜而還家。婦見不識乃語之曰。卿是何人。夫即具説得珠之由。」(『大正蔵』三336c2-6)。
- (19) 『六度集經』には主人公の名前が出てこない。全編にわたって太子である。
- (20) 国訳一切経本縁5. 1935: 171] を参照。「太子高声謂七國王。厥音遠震若師子吼。喻以佛教。為天牧民當以仁道。」(『大正蔵』三47a11-14)。
- (21) 日本語訳は、[片山一良訳 1982: 154] 参照。

78. Hatthikkhandhañ ca āruya āropetvā Pabhāvatim
Saṅgāmaṃ otarivāna sīhanādaṃ naḍi Kuso.

79. Tassa taṃ nadato sutvā sīhasseva itare migā

Khattiyāpi palāyiṃsu Kusaṣaddabhayaṭṭhitā. [Viggo Fausböll 1990: 310]

- (22) [平岡聡 2010: 157]。So dāni rājā kuṣo maheśākhyam hastināgamabhiruḥitvā mahatā janakāyena sārddham nagaraddāramavaddārāpayitvā nirdhāvito | tena rājñā kuṣena sīmhanādo mukto | tena sīmhanādaṃ nadantena sarve sapta rājāno sabalā savāhanā bhagnā | [Émile Sénart ed. 1890: 489-490]

- (23) 『賢愚経』においては7ヶ国ではなく、6ヶ国。

- (24) [国訳一切経本縁7. 1930] を参照。「時多羅睺施即持弓具。出城趣賊。吹貝叩弓。六軍驚駭。怖不能動。即入軍中。斬六王首。奪取冠飾。攝録其衆。」(『大正蔵』四365a9-11)。

- (25) 喻以仏教。為天牧民当以仁道。(『大正蔵』三47a12-13)。「為天牧民」とは「王」

のことである。

- (26) 太子在國布施四遠。吾輒同願。今當歷嶮而猶留守榮。豈仁道哉。(『大正藏』三 8c12-14)。
- (27) 『大正藏』七者不坐高廣大床。八者不得歌舞作樂香油塗身。(『大正藏』三 339a26-27)。
- (28) 殺彼全已非佛仁道。吾不爲也(『大正藏』三 18b25)。
- (29) 斯可戮矣。(『大正藏』三 18c17)。
- (30) 吾寧殞軀命。不去仁道也(『大正藏』三 18c18)。
- (31) 夫厚於味者即仁道薄。仁道薄者豺狼心興。夫爲狼苟貪肉味。而賊物命(『大正藏』三 22b25-26)。
- (32) 觀佛道邊坐乎半枯之樹(『大正藏』三 31a4)。
- (33) 不坐純生而處半枯將有由乎(『大正藏』三 31a5)。「純生」とは「元気で生き生きとしている」ことである。
- (34) 斯樹名釋。吾愛其名。以仁道濟其難。潤其枯惠其生也(『大正藏』三 31a6-7)。
- (35) 端爾心興德惠安群生。恕己濟彼。慎無殺生。盜人財物。姪彼非妻。兩舌惡罵。妄言綺語。嫉妬恚癡。誹謗三尊。禍之大莫尚十惡。福榮之尊。夫唯十善矣。殺物者爲自殺。活物者爲自活。策心念惡。口言惡。身行惡。莫若勞心念道。口言道。身行道。施善福追。爲惡禍尋。猶響之應聲影之追形也。(『大正藏』三 31c21-28)。
- (36) [SAT 2015]。
- (37) 『大正藏』五三 54c9 (2ヶ所), 165a23, 175b6。
- (38) 『大正藏』四九 230c4, 255a25。
- (39) 『大正藏』五二 12a19-20, 22a9。
- (40) 『大正藏』五十 103b26。
- (41) 『大正藏』五二 635a2。
- (42) 『大正藏』四九 354c19。
- (43) 『大正藏』四九 538c6。
- (44) 『大正藏』四九 791b2。
- (45) 爲天牧民當以仁道。(『大正藏』三 0047a12-13)。「天の為に民を牧する」とは「王」のことである。
- (46) 有臨終盡仁之誠(『大正藏』三 5c10-11)。
- (47) 以五戒六度八齋十善。教化兆民。(『大正藏』三 47a25)。
- (48) 以五教治政。不枉人民。(『大正藏』三 52a17)。
- (49) 一者慈仁不殺恩及群生。二者清讓不盜捐己濟衆。三者貞潔不姪不犯諸欲。四者誠信不欺言無華飾。五者奉孝不醉行無沾汚。(『大正藏』三 52a17-20)。
- (50) 仁者普慈。祐報響應。(『大正藏』三 29c4)。

- (51) 君仁臣忠。父義子孝。夫信婦貞。比門有賢。(『大正蔵』三37a24-25)。
- (52) 国豊民富相率以道。民無殺者。盗人財物。姪人婦女。兩舌惡口。妄言綺語。嫉妬恚癡。兇愚之心。寂而消滅。皆信佛信法信沙門。信爲善有福作惡有殃。舉國和樂。鞭杖不行。仇敵稱臣。戰器朽于藏。牢獄無繫囚。人民稱善。我生遇哉。(『大正蔵』三11c03-9)。
- (53) 偷賊競施。(『大正蔵』三11a14)。
- (54) 其仁遠照。禽獸附恃。(『大正蔵』三24b25)。
- (55) 遐邇稱仁。民歸若流。(『大正蔵』三33a02-3)。
- (56) 民之飢者即吾餓之。民之寒者即吾裸之。(『大正蔵』三11b25-26)。
- (57) 民之苦樂在我而已。(『大正蔵』三11b27)。
- (58) 吾心穢行濁。不合三尊四恩之教。苦酷人民罪當伐己流被下劣。枯旱累載。黎庶飢饉怨痛傷情。(『大正蔵』三2a22-24)。
- (59) 願除民灾以禍罪我。(『大正蔵』三2a25)。
- (60) 靖心齋肅退食絕獻。頓首悔過曰。民之不善。咎在我身。願喪吾命惠民雨沢。(『大正蔵』三2a15-17)。
- (61) 即得五福。一者長壽。二者顏華日更好色。三者德勳八方上下。四者無病氣力日增。五者四境安隱心常歡喜。王後壽終。如強健人。飽食快臥。忽然上生忉利天上。(『大正蔵』三11c10-14)。
- (62) 顏影15輝煌。踰彼桃華。(『大正蔵』三47a27)。
- (63) [慧皎519: 77]。會在吳朝亟說正法。以晤性凶龜。不及妙義。唯叙報應近驗。以開諷其心焉。(『大正蔵』五五97a11-12)。
- (64) [中国仏教史 1992: 520]。「他竭力用仏教去説服国主」([中国仏教史 1985: 431])。
- (65) [伊藤千賀子 2013] を参照されたい。
- (66) [伊藤千賀子 2013: 993]。

引用文献・参考文献

- 赤沼智善 1967. 『印度仏教固有名詞辞典』京都：法蔵館。
- 伊藤千賀子 2008. 「クサ・ジャータカ」『仏教説話の展開と変容』東京：ノンブル社，pp. 265-299.
- 伊藤千賀子 2013. 「『六度集經』の成立について—康僧会の動機と目的—」『印度学仏教学研究』61(2)，東京：日本印度学仏教学会，pp. 996-991.
- 伊藤千賀子 2014. 「『六度集經』と他経典とのかかわり—康僧会の経典作成の思考方法—」『印度学仏教学研究』62(2)，東京：日本印度学仏教学会，pp. 1029-1024.
- 伊藤千賀子 2016. 「康僧会と建初寺—寺号の由来について—」『印度学仏教学研究』30

- 号, 東京: 日本印度学仏教学会, pp. 1036-1031.
- 伊藤千賀子 2016. 『『六度集經』における康僧会の意図と受容』『パースリ学仏教文化学』63(2), 愛知: パースリ学仏教文化学会, pp. 87-105.
- 神塚淑子代表 2008. 『六朝隋唐時代における仏教比喩經類の受容と道教』(平成18年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書).
- 広辞苑 2018. 編者: 新村出, 東京: 岩波書店.
- 慧皎 519. 『高僧伝(1)』吉川忠夫・船山徹訳, 東京: 岩波書店, 2009.
- 小川雅文 2006. 『黄金色に輝く龍大空にかけ昇る一ベトナムの歴史一』, 東京: 文芸館.
- 国訳一切経本縁5. 1929. 『国訳一切経本縁部5』東京: 大東出版社, pp. 281-283.
- 国訳一切経本縁6. 1935. 『国訳一切経本縁部6』東京: 大東出版社, pp. 293-171.
- 国訳一切経本縁7. 1930. 『国訳一切経本縁部7』東京: 大東出版社, pp. 117-121.
- 国訳一切経律23. 1933. 『国訳一切経律部23』東京: 大東出版社, pp. 205-208.
- 斎藤明 2011. 「大乘仏教の成立」『シリーズ大乘仏教2』東京: 春秋社, pp. 3-36.
- 片山一良訳 1982. 『ジャータカ全集』8, 監修・補註: 中村元, 東京: 春秋社, pp. 123-155.
- 出三蔵記集510-518. 『大正蔵』五五1-114.
- 総合仏教 1987. 『総合仏教大辞典』総合仏教大辞典編集委員会, 京都: 法蔵館.
- 大蔵経全解説 1998. 『大蔵経全解説大事典』編者: 鎌田茂雄・河村孝照・中尾良慶・福田亮成・吉元信行, 東京: 雄山閣出版.
- 中国仏教史 1992. 『定本 中国仏教史 I』任繼愈主編, 訳者: 丘山新・小川隆・河野訓・中條道昭, 東京: 柏書房(原本: 中国仏教史 1985. 第一巻, 任繼愈主編, 中国: 中国社会科学出版社.)
- 中嶋隆蔵編訳 1989. 『高僧伝: 仏陀とともに』東京: 講談社.
- 中嶋隆蔵 1997. 『出三蔵記集序巻 訳注』京都: 平楽寺書店.
- 中村元 2001. 『広説仏教語大辞典』東京: 東京書籍株式会社.
- 干潟龍祥 1978. 『本生経類の思想史的研究 附篇 本生経類全表』東京: 山喜房仏書林.
- 平岡聡 2010. 『ブッダの大いなる物語 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』下, 東京: 大蔵出版株式会社, pp. 98-182. (原本: Émile Sénart ed. 1890. *Le Mahāvastu*, Volume 2, including introductions and commentary ed. by E. Sénart., Paris: Imprimerie Nationale, pp. 488-495. Émile Sénart ed. 1897. *Le Mahāvastu*, Volume 3, including introductions and commentary ed. by E. Sénart., Paris: Imprimerie Nationale, pp. 1-27)
- 藤村隆淳 2002. 『マハーヴァストゥの菩薩思想』東京: 山喜房仏書林.
- 仏書解説 1999. 『仏書解説大辞典 縮刷版』小野 玄妙・丸山孝雄編, 東京: 大東出版社.

- 仏書解説 2000. 『仏書解説大辞典』 小野 玄妙・丸山孝雄編纂, 初版; 1993-1935, 東京: 大東出版社.
- 仏典解題 1985. 『仏典解題事典』 責任編集: 水野弘元・中村元・平川彰・玉城康四郎, 東京: 春秋社.
- 蒲正信 2001. 『六度集経』 中国: 巴蜀本社出版.
- 牧田諦亮 1960. 「康僧会」『アジア歴史事典』 東京: 平凡社, p. 272.
- 松本信弘 1969. 『ベトナム小史』 東京: 岩波新書.
- 八尾史 2013. 『根本説一切有部律彙事』 東京: 連合出版, pp. 326-332.
- 梁曉虹 1996. 『六度集経』 台湾: 仏光文化事業有限公司.
- 六度集経 1993. 訳者: 康僧会, 台湾: 新文豊出版.
- Cowell, E. B. ed. 1895. *The Jataka or Stories of the Buddha's Former Births*, Vol. 1-6, England: Cambridge at the University Press.
- Édouard Chavannes 1910. *Cinq cents contes et apologues extraits du Tripitaka chinois et traduits en français*, Bibliothèque de l'institut des hautes études chinoises, volume premier, Paris, 1910, p. 1.
- J. J. Jones tr. 1949. *The Mahavastu* (English translation), including footnotes and glossary, London: Pali Text Society, 1976-1978.
- Rhys Davids, tr. 1878. *Buddhist birth-stories: Jataka tales*, The commentarial introd. entitled Nidanakatha; the story of the lineage. Translated from V. Fausböll's ed. of the Pali text, London: G. Routledge.
- SAT 2015. 『大正新脩大藏経テキストデータベース』 東京: 日本印度学仏教学会.
- Viggo Fausböll ed. 1990. *The Jātaka together with its commentary*, ed. by V. Fausboll, Vol. 5, PTS, England: Oxford, 1877-1896, 1991, pp. 278-312.